

LION LLM が拓く次世代知財戦略：AI 主権の確立による研究開発から価値創造までの変革

Gemini

序論：なぜ独自 LLM が知財戦略のゲームチェンジャーとなるのか

AI 主権の戦略的必須性

ライオン株式会社（以下、ライオン）による独自生成 AI「LION LLM」の開発は、単なる情報技術プロジェクトではなく、企業の競争優位性を根底から再定義する戦略的決断である。これは「AI 主権（AI Sovereignty）」の確立に向けた動きと解釈できる¹。データが中核的な経営資産となる現代において、そのデータを処理する AI 基盤を自社の管理下に置くことは、長期的な競争力を確保する上で不可欠である。外部の汎用 AI サービスを利用することは、機密情報や研究開発データが意図せず学習データとして利用されたり、サイバー攻撃の標的となったりする情報漏洩リスクを本質的に内包する²。LION LLM は、このリスクを根本的に排除し、企業の生命線である知的資産を保護するための「デジタルな堀（Digital Moat）」を構築する基盤となる⁴。

知財活動におけるパラダイムシフト

LION LLM の導入は、ライオンの知財活動にパラダイムシフトを促す。従来の知財部門が担ってきた、法的保護を主眼とする受動的かつコスト中心の機能から、データを駆使して事業戦略

や研究開発の方向性を能動的に導き出す、価値創造のエンジンへと変貌を遂げるのである。この変革は、産業界全体で進行する「知財 DX（デジタルトランスフォーメーション）」の潮流とも完全に一致しており、ライオンがその先駆者となる可能性を示唆している⁵。本レポートでは、LION LLM がライオンの知財活動の各フェーズにおいて、具体的にどのような変革をもたらすかを多角的に分析・推察する。

表 1：LION LLM による知財活動の変革

知財活動フェーズ	従来のアプローチ（LION LLM 導入前）	LION LLM が可能にするアプローチ（予測される未来）
研究開発・発明創出	研究者の直感や試行錯誤に依存する実験。発見プロセスが長期化。	データ駆動型の仮説生成（MI）。材料設計の加速。戦略的なホワイトスペースの特定 ⁴ 。
調査・分析	手作業によるキーワードベースの検索。時間的制約。言語の壁。静的な分析 ¹⁰ 。	文脈を理解するセマンティック検索。リアルタイムの技術動向分析（IP ランドスケープ）。多言語解析。予測的洞察の提供 ⁹ 。
権利化業務	発明届出書や特許明細書の手作業による作成。個人の専門性に大きく依存。	明細書や請求項のドラフト作成支援。品質の標準化。作成時間の大幅な短縮 ¹⁴ 。
ポートフォリオ管理	静的かつ定期的なレビュー。主観的な価値評価。事業戦略との乖離。	データに基づいた動的なポートフォリオ最適化。AI による価値評価。研究開発・事業目標との完全な連携 ¹³ 。

リスク・ガバナンス	外部ツール利用による営業秘密漏洩リスク。ナレッジの属人化・サイロ化。明示的なルールへの依存。	セキュアなオンプレミス環境（「デジタルな堀」）。営業秘密の保護。ナレッジの自動的な形式知化と継承 ¹ 。
-----------	--	---

第 1 部：発明創出の源流を変えるエンジン

1.1 マテリアルズ・インフォマティクス（MI）の超加速

ライオンのような化学メーカーにとって、マテリアルズ・インフォマティクス（MI）は研究開発の効率を飛躍的に向上させるための核心的手法である⁷。LION LLM は、この MI 活動を前例のないレベルにまで加速させる分析エンジンとして機能する。

MI の成功は、学習させるデータの「量」と「質」に大きく依存する⁸。特に、論文などでは公開されにくい「失敗した実験データ」は、AI が成功と失敗の境界条件を学習する上で極めて重要である⁸。LION LLM は、ライオンが長年にわたり蓄積してきた成功・失敗双方の実験データ、研究ノート、技術レポートといった構造化・非構造化データを網羅的に学習する。これにより、単に公開情報を学習した汎用 AI では到達できない、ライオンの技術文脈に深く根差した理解を獲得する。

この深い理解に基づき、LION LLM は新たな素材の組成や配合に関する新規性の高い仮説を自動生成する⁷。研究者は、AI が提示した有望な仮説に絞って物理的な実験を行うことで、従来は試行錯誤に費やしていた膨大な時間とリソースを削減できる。横浜ゴムが AI 配合設計システムによって開発スピードを向上させた事例のように、LION LLM は「作って測る」従来型の開発プロセスを、「予測して検証する」という次世代のサイクルへと転換させる²⁰。この「Design-Build-Test-Learn」サイクルの劇的な高速化は、ライオンの中期経営計画が掲げる「製品開発のスピードアップ」という目標達成に直接的に貢献する⁴。

1.2 ホワイトスペースの戦略的探査と未来の市場機会の発見

特許が出願されていない技術領域、すなわち「ホワイトスペース」の特定は、競合が不在の市場を開拓するための重要な戦略である⁹。しかし、従来のホワイトスペース分析は、特許データに限定されたキーワード検索が中心であり、時間と労力を要する静的な作業であった。LION LLM は、このプロセスを動的かつ戦略的な「機会発見プロセス」へと昇華させる。

LION LLM の最大の特徴は、特許情報だけでなく、学術論文、ニュース記事、市場レポート、さらには消費者動向データといった多様なモダリティの情報を統合的に分析できる能力にある⁹。これにより、単なる技術的な空白地帯を見つけるだけでなく、その技術がどのような市場ニーズに応え、どのような事業機会に繋がりを示すのかを文脈的に理解することが可能になる。

例えば、LION LLM は、消費者の不満を示す SNS の投稿データと、全く異なる分野の学術論文で報告されている新素材の特性を結びつけ、「この新素材は、消費者が抱えるあの問題を解決できる可能性がある」といった、人間では気づきにくい異分野間の関連性を見出すことができる。これは、従来のキーワード検索では決して捉えられない、概念レベルでのホワイトスペース探査である¹²。

このような分析がほぼリアルタイムで実行可能になることで、ライオンの経営層や研究開発部門は、市場の萌芽的な変化や競合の新たな動きを即座に察知し、研究開発の舵を迅速に切ることができるようになる¹¹。これは、IP ランドスケープを知的財産部門の専門業務から、経営戦略と一体化した全社的なインテリジェンス活動へと進化させるものであり、旭化成などが目指す IP ランドスケープの理想形を具現化するものである²³。

第 2 部：知財業務パイプラインの圧倒的効率化と高度化

2.1 「調査」から「洞察」へ：IP ランドスケープの進化

IP ランドスケープは、知財情報を経営戦略に活かすための強力な手法であるが、専門的なスキルと多大な工数を要するため、一部のテーマに限定して実施されることが多かった¹³。LION LLM は、この IP ランドスケープを誰もがアクセス可能なオンデマンドの戦略ツールへと変革し、知財情報の活用を民主化する。

研究開発者や事業企画担当者が、「生分解性を持つ界面活性剤に関する最新技術トレンドと、その分野で注目すべきスタートアップ企業をリストアップし、それぞれの技術的強みを要約して」といった自然言語での問いを LION LLM に投げかけるだけで、関連特許、論文、ニュース

記事を横断的に分析し、可視化されたサマリーレポートを数分から数時間で受け取ることが可能になる。

このプロセスでは、従来は数週間を要した多言語・多国間の特許文献調査¹⁰、数千件に及ぶ文献の分類・整理といった煩雑な作業が完全に自動化される。これにより、人間の専門家はデータ収集や整理といった低付加価値業務から解放され、AI が生成した「ファクト」に基づき、戦略的な意味合いを解釈し、経営層への提言を行うという、より高度な「洞察」の創出に集中できるようになる。これは、特許調査にかかるコストを劇的に削減するだけでなく、調査の質そのものを向上させる効果をもたらす¹¹。

2.2 知財文書作成の自動化と品質向上

特許出願プロセスにおける発明提案書や特許明細書の作成は、専門性が高く、多くの時間を要する業務である¹⁶。LION LLM は、この文書作成プロセスを支援し、権利化業務の効率と品質を大幅に向上させる。

研究者が実験ノートや社内報告書、あるいは簡単な発明の概要を LION LLM に入力すると、AI はそれを基に特許明細書のドラフトを自動生成する。これには、発明の背景、課題、解決手段、実施例といった詳細な記述が含まれる¹⁴。

この機能の真価は、単なる文章生成に留まらない点にある。LION LLM は、ライオンが過去に出願し権利化した全ての特許明細書を学習データとしている。そのため、ライオン独自の技術用語の適切な使用法、審査官に評価されやすい論理構成、そして最も重要な「強い権利」を取得するための請求項の表現スタイルを熟知している。これにより、作成されるドラフトは、単に形式が整っているだけでなく、ライオンの知財戦略に最適化された品質を持つ。結果として、発明者や知財担当者、弁理士の負担が軽減されるだけでなく、出願される特許の品質が標準化され、企業全体の特許ポートフォリオの価値向上に繋がる。

2.3 知財ポートフォリオの動的最適化

企業の特許ポートフォリオは、維持するだけで多額の費用が発生する一方、その価値は市場や技術の変化によって常に変動する。そのため、事業戦略との整合性を取りながら、保有する特許を定期的に見直し、最適化することが不可欠である¹⁸。LION LLM は、このポートフォリオ管理を、静的な棚卸し作業から動的な戦略的意思決定プロセスへと進化させる。

LION LLM は、個々の特許に対して、現在の製品ラインとの関連性、後続特許からの引用頻度、競合他社の類似技術の動向、関連市場の成長性といった多角的なデータを分析し、客観的な「戦略的価値スコア」を算出する¹⁷。このスコアは、どの特許を維持し、どの特許を放棄またはライセンスアウトするべきかという経営判断に、データに基づいた明確な根拠を提供する。

さらに、この分析は一度きりで終わらない。LION LLM は常に最新の市場情報や競合の出願動向を監視し、ポートフォリオ内の各特許の価値スコアを動的に更新する。これにより、例えばある技術分野で競合が突然活発な出願を開始した場合、関連する自社特許の防御的重要性が高まったことを自動的にアラートとして通知することが可能になる。このように、AI を活用することで、知財ポートフォリオを事業環境の変化に即応する「生きた資産」として管理し、その価値を最大化することができる¹³。

第3部：「デジタルな堀」の構築：競争優位の源泉たる情報の保護

3.1 営業秘密と研究開発ノウハウの鉄壁の守り

独自 LLM を開発する最大の戦略的理由は、企業の競争優位の源泉である機密情報を守るための「デジタルな堀」を構築することにある⁴。近年の生成 AI の急速な普及に伴い、従業員が利便性のために外部の公開 AI サービスに業務上の機密情報や個人情報を入力してしまい、情報が意図せず漏洩・学習されてしまう「シャドーAI」のリスクが深刻化している³。

LION LLM は、ライオンの管理下にあるセキュアなクラウド環境（AWS ParallelCluster など）で稼働する自己完結型のシステムである¹。研究開発データ、配合情報、製造ノウハウ、事業戦略といった極めて機密性の高い情報に関する分析や問い合わせは、すべてこの閉じた環境内で処理される。データが外部のサーバーに送信されることは一切なく、外部サービスの学習データとして利用されるリスクは完全に排除される¹⁹。これにより、従業員は最先端の AI の恩恵を享受しつつ、企業は最も価値ある資産である営業秘密を鉄壁の守りで保護することが可能となる。これは、外部サービスを利用する競合他社に対する、決定的かつ持続的な優位性となる。

3.2 改正「営業秘密管理指針」への準拠とガバナンス体制

不正競争防止法上で「営業秘密」として法的な保護を受けるためには、「秘密として管理されていること（秘密管理性）」が要件となる³。経済産業省が2025年3月に改訂した「営業秘密管理指針」では、生成AIの利用拡大を踏まえ、AIに営業秘密を入力した場合の秘密管理性に関する考え方が新たに示された²。

この指針では、AI利用後も継続的な管理措置が必要であることなどが示されており、外部のAIサービスを利用する場合には、そのサービスが自社のセキュリティ要件を満たしているかを厳格に評価する必要がある¹⁹。LION LLMのような自社専用システムは、この「秘密管理性」の要件を満たす上で極めて有利である。アクセスログの完全な監視、利用者の権限設定、入力情報の管理といった技術的対策を自社のポリシーに合わせて実装できるため、当局や司法に対して、企業が営業秘密を適切に管理する意思と実態を明確に示すことができる²。

ただし、システムを導入するだけでは不十分であり、LION LLMの利用に関する社内ガイドラインの策定、従業員への教育、定期的な監査といったAIガバナンス体制の構築が不可欠である²⁶。これにより、技術的・組織的両面から、堅牢な情報管理体制を確立することが求められる。

3.3 暗黙知の形式知化とナレッジマネジメント

企業の真の競争力は、特許やマニュアルといった「形式知」だけでなく、熟練研究者の頭の中にある経験則や勘、ノウハウといった「暗黙知」に宿っていることが多い。しかし、この暗黙知は属人性が高く、担当者の異動や退職によって失われやすいという大きな経営課題を抱えている。

LION LLMは、この課題に対する画期的な解決策を提供する。システムは、過去数十年分にわたる研究レポート、技術メモ、さらには社内の技術的な質疑応答のやり取りといった膨大なテキストデータを学習する。このプロセスを通じて、LION LLMは個々の研究者が持つ暗黙知を吸収し、組織全体の共有知、すなわち「形式知」へと変換していく。

例えば、若手研究者が開発で壁にぶつかった際、「過去に類似の課題で、Aというアプローチがなぜ失敗したのか」とLION LLMに問いかけると、AIは退職したベテラン研究者が残した報告書の断片や関連議論を瞬時に探し出し、その背景にある思考プロセスまで含めて要約・提示することができる。これは、組織の集散的知性を保存・活用する「コーポレートブレイン（企業の脳）」を構築するに等しい¹。部門間の壁を越えて知識が共有されることで、予期せぬイノ

バージョンが誘発され、組織全体の研究開発能力が底上げされる。このナレッジマネジメント機能こそが、「デジタルな堀」をさらに強固にする、模倣困難な競争優位の源泉となる。

第4部：未来への展望と法的・倫理的考察

4.1 AI と発明者性：法的課題への戦略的備え

LION LLM が発明創出プロセスに深く関与するようになると、「AI が生成した発明は誰のものか」という、発明者性に関する法的な課題が現実味を帯びてくる。現状、日本の特許法を含む世界の主要な法制度では、発明者は自然人（人間）であることが前提とされている²⁷。AI が自律的に発明を完成させたと見なされるケースはまだ確認されていないが、AI の貢献度が高まるにつれて、その境界は曖昧になる²⁹。

政府もこの問題を重要視し、AI を利用した発明の保護のあり方について検討を開始している³⁰。ライオンとしては、この法的な不確実性に対して戦略的に備える必要がある。具体的には、AI が発明プロセスにどのように貢献したかを詳細に記録する内部プロセスを確立することが重要となる。例えば、「課題設定」「解決手段の着想」「実験による効果の確認」といった発明の核となるステップにおいて、人間の研究者がどのように創造的な関与を果たしたかを明確に文書化するガイドラインを整備することが求められる²⁸。これにより、将来的に特許の有効性が争われた際に、人間の発明者としての適格性を立証することが可能となる。法制度の動向を注視しつつ、AI 支援発明に関する社内規程を先行して整備することが、将来のリスクを回避する上で賢明な策となる。

4.2 AI 時代の「進歩性」：特許性の判断基準の変化への対応

特許を取得するための重要な要件の一つに「進歩性」がある。これは、その発明が「当業者（その技術分野の通常の知識を有する者）」にとって容易に思いつくことができない、という基準で判断される²⁸。LION LLM のような高度な AI ツールが研究開発の現場で標準的になると、この「当業者」の能力水準が劇的に向上することが予想される。

これまでであれば人間の研究者が多大な労力をかけて見出していたような、既存技術の最適な

組み合わせやパラメータの最適化は、AI にとっては比較的容易なタスクとなる可能性がある。その結果、AI を使えば容易に到達できるレベルの発明は「進歩性なし」と判断され、特許を取得することが従来よりも困難になる時代が到来するかもしれない²⁸。

この変化に対応するため、ライオンの知財戦略は、単なる改良発明の保護から、より根源的なブレークスルーや、AI では着想困難な異分野技術の融合、あるいは全く新しい科学的原理の発見といった、人間の創造性が決定的な役割を果たす発明の保護へと重点を移していく必要がある。コンピュータシミュレーションの発明が、単なる計算結果に留まらず、現実世界における技術的課題の解決に貢献する場合に特許性が認められるのと同様に³¹、AI による生成物も、その背景にある人間の非自明な洞察や課題設定が権利保護の鍵となるだろう。

4.3 知財契約・ライセンス実務の変革

LION LLM の活用範囲は、特許創出や分析に留まらず、共同研究開発契約、ライセンス契約、秘密保持契約（NDA）といった知財関連の契約実務にも及ぶ。

AI による契約書レビューは、契約書に潜むリスクを自動で検知し、業務効率を大幅に向上させるツールとして既に市場に登場している³³。LION LLM は、これをさらに進化させることができる。ライオンが過去に締結した全ての契約書を学習させることで、汎用的なリスク指摘だけでなく、「ライオンの標準的な契約条件から逸脱している条項」や「過去に特定の取引先との間で問題となった条項」といった、自社に特化したコンテキストでのレビューが可能になる。

さらに、契約書のドラフト作成支援も強力なユースケースとなる³⁶。共同研究の目的や分担、成果物の帰属といった基本条件を入力するだけで、社の標準テンプレートに準拠した質の高い契約書ドラフトを瞬時に生成できる。これにより、法務・知財担当者は定型的な作業から解放され、交渉戦略の立案や、ビジネスモデルの根幹に関わるような複雑な契約の設計といった、より付加価値の高い業務に集中できるようになる³⁸。

結論：LION LLM が築く持続的競争優位性

本レポートで詳述したように、独自生成 AI「LION LLM」の導入は、ライオン株式会社の知財活動を根底から変革し、持続的な競争優位性を構築するための強力な推進力となる。その影響は、単なる業務効率化のレベルを遥かに超え、企業の価値創造プロセスそのものを再定義する。

マテリアルズ・インフォマティクスの超加速と戦略的なホワイトスペース探索は、中期経営計画の柱である「製品開発のスピードアップ」と「グループ R&D 体制の強化」を直接的に実現する⁴。これにより、革新的な製品をより早く市場に投入し、収益性の向上（ROIC や EPS CAGR といった財務目標の達成）に貢献するサイクルが生まれる。

調査・分析から権利化、ポートフォリオ管理に至る知財業務パイプライン全体の高度化は、知財部門をコストセンターから、経営戦略に不可欠なインテリジェンスを提供するプロフィットセンターへと変貌させる。

そして最も重要なのは、「デジタルな堀」の構築である。LION LLM というセキュアな基盤は、ライオンの競争力の源泉である営業秘密や研究開発ノウハウを外部の脅威から守り抜くと同時に、社内に眠る暗黙知を形式知化し、組織全体の知的資産として継承・発展させることを可能にする。

LION LLM という技術基盤そのものがもたらす優位性もさることながら、最終的な、そして最も模倣困難な競争優位性は、この強力なツールを組織のワークフロー、企業文化、そして戦略的意思決定プロセスに深く統合し、人間と AI が共生する新たなイノベーション・エコシステムを他社に先駆けて構築できるかどうかにかかっている。LION LLM は、そのための鍵となる戦略的資産である。

引用文献

1. 1 月 1, 1970 にアクセス、uploaded: ライオン独自生成 AI 「LION LLM」 とものづくり DX における生成 AI の業界分析 ChatGPT.pdf
2. 営業秘密管理指針が大幅改訂！テレワーク・AI 時代の企業が知るべき ..., 10 月 9, 2025 にアクセス、<https://nexpert-law.com/business/columns/3745/>
3. 【要注意】生成 AI 活用の法的リスクと対策ガイド | DX 研究所 - note, 10 月 9, 2025 にアクセス、https://note.com/dx_lab0/n/nc58614f11705
4. 1 月 1, 1970 にアクセス、uploaded: ライオン独自 AI 「LION LLM」 深掘り Gemini.docx
5. 知財 DX ラボ - アイ・ピー・ファイン株式会社, 10 月 9, 2025 にアクセス、https://ipfine.jp/ip_ai/
6. 本当に必要？知財戦略に DX が求められるワケとは, 10 月 9, 2025 にアクセス、<https://hr.tokkyo-lab.com/column/pinfosb/chizaidx>
7. マテリアルズインフォマティクス(MI)と生成 AI の連携による材料開発 ..., 10 月 9, 2025 にアクセス、<https://www.mi-seek.com/knowledge/generative-ai.html>
8. マテリアルズ・インフォマティクスとは？AI 活用方法、国内成功事例や導入事例、材料開発におけるメリット・課題、解決策を解説！, 10 月 9, 2025 にアクセス、<https://ai-market.jp/industry/materials-informatics/>
9. AI による特許検索・特許分析 - QUID- | 伊藤忠テクノ ..., 10 月 9, 2025 にアクセス、https://ls.ctc-g.co.jp/products/quid/quid_case_innovation.html

10. 株式会社エムニ, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://www.emuniinc.jp/service/case/gt3mkyhfhqzz>
11. AI で特許調査のコストを 1000 分の 1 に | 活用戦略を詳しく解説 ..., 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://media.emuniinc.jp/2025/01/10/ai-patent-search/>
12. 特許検索に AI は効果的？調査の概要や LLM を活用するメリット、導入事例を徹底解説！, 10 月 9, 2025 にアクセス、
https://ai-market.jp/technology/llm-patent_search/
13. AI を活用した特許調査と知財戦略のメリット, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://www.chizainomori.com/knowledge/ai-utilization.html>
14. 明細書（詳細説明）生成 AI, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://help.appia-engine.com/s/article/specificationdetaileddescriptiongenerationai>
15. 生成 AI - Tokkyo.Ai プライベート AI 特許, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://www.tokkyo.ai/pvt/gpt/>
16. 特許実務における生成 AI の活用シーンとは - Smart-IP 株式会社, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://smart-ip.jp/blog/006>
17. 戦略的な知財ポートフォリオ管理を支援するシステムで知財のビジネス貢献を促進 - Anaqua, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://www.anaqua.com/ja/aqx-corporate/portfolio-management/>
18. 企業価値を創る知財戦略 | 特許ポートフォリオの構築・分析・活用 - オウンドメディア, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://media.emuniinc.jp/2025/05/29/patent-portfolio/>
19. 【知らないで損する】LLM の安全な使い方：企業情報漏洩を防ぐ 7 つのセキュリティ対策 - note, 10 月 9, 2025 にアクセス、
https://note.com/lucky_ram7202/n/nbad87c40705a
20. 化学メーカーの AI 活用事例 20 選！プラント・保全自動化や需給最適化 | ニューラルオプト, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://neural-opt.com/chemical-ai-cases/>
21. 生成 AI 特許分析 GPTs の使い方 - note, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://note.com/tsunobuchi/n/n8420871afe23>
22. Patsnap（パットスナップ） | AI でイノベーションを加速 | パトコア株式会社, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://patcore.com/product/patsnap>
23. 総合化学メーカーの知的財産部門における活用 | 経済情報プラットフォーム スピーダ(Speeda), 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://jp.ub-speeda.com/customers/asahikasei/>
24. LLM とセキュリティ - 総務省, 10 月 9, 2025 にアクセス、
https://www.soumu.go.jp/main_content/000948624.pdf
25. 「秘密情報の保護ハンドブック」・「限定提供データの指針」における生成 AI に関する記載部分, 10 月 9, 2025 にアクセス、
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/ai_kentoukai/gijisidai/dai6/siryou2.pdf
26. 知的財産推進計画 2025 に向けた取組等について - 経済産業省, 10 月 9, 2025 にアクセス、
https://www.meti.go.jp/shingikai/sankoshin/chiteki_zaisan/fusei_kyoso/pdf/026_0

[4_00.pdf](#)

27. AI 技術の発達を踏まえた特許制度上の適切な対応, 10 月 9, 2025 にアクセス、
https://www.jpo.go.jp/resources/shingikai/sangyo-kouzou/shousai/tokkyo_shoi/document/51-shiryuu/02.pdf
28. AI 技術の進展を踏まえた発明の保護の在り方について, 10 月 9, 2025 にアクセス、
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/ai_kentoukai/gijisidai/dai3/siryuu3.pdf
29. 「AI を利活用した創作の特許法上の保護の在り方に関する調査研究」の調査結果を公表します, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://www.meti.go.jp/press/2024/04/20240422002/20240422002.html>
30. AI 発明についての政府の検討ー発明に使った AI の開発者も共同発明者か？, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://www.yuasa-hara.co.jp/lawinfo/5558/>
31. EPO] コンピュータシミュレーションの特許性に関する拡大審判部の審決 - 創英国際特許法律事務所, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://www.soei.com/%EF%BC%BB%E7%89%B9%E8%A8%B1%EF%BC%8Fepo%EF%BC%BD%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%83%94%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%82%BF%E3%82%B7%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3%E3%81%AE%E7%89%B9/>
32. コンピュータ利用のシミュレーションは、欧州で特許を受けられるか？ - COHAUSZ & FLORACK, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://www.cohausz-florack.de/fileadmin/Artikel/Computer-Implemented Simulations Patentable in Europe Japanese.pdf>
33. AI 契約審査プラットフォーム「LegalForce」知的財産関連契約書 レビュー対応類型を拡充, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000081.000036601.html>
34. AI 契約書レビューサービス提供企業の特許出願傾向を分析 - Tokkyo.Ai, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://www.tokkyo.ai/tokkyo-wiki/contract-ai-review/>
35. 契約書に AI は活用できる？作成・レビュー・管理で利用するメリットや注意点を解説 | クラウドサイン, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://www.cloudsign.jp/media/how-to-use-ai-for-contracts/>
36. AI できちんとした契約書を作る方法 | シュンサク | 瞬作 - note, 10 月 9, 2025 にアクセス、
https://note.com/skills_master/n/n96d5b4a66a96
37. AI を使った契約書作成とは？リーガルチェックのリスクや ChatGPT での作成例も解説, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://biz.moneyforward.com/contract/basic/17205/>
38. AI でリーガルチェックを効率化する方法 | 仕組み・適法性・メリットを徹底解説 - LegalOn Cloud, 10 月 9, 2025 にアクセス、
<https://www.legalon-cloud.com/media/ai-contract-check>